

# 1000年後の人々の命をつなぐ 新しいまちづくり

岩手県山田町震災復興事業(2013年◆平成25年～)



穏やかな秋晴れに恵まれた、去る10月30日。岩手県中部の山田町大沢地区で「復興記念さすなまつり」が開かれた。同地区では、震災以降に行われてきた高台造成・市街地かさ上げの工事が概ね完了し、10月をもって全宅地の完成・引き渡しを迎えた。まつりは、それを祝って催されたもので、山を切り崩して作った大沢第1住宅団地内の会場では、地元保育園児のかわいらしい八木節や大沢大神楽、餅や菓子をまく「えびすまき」などが行われ、多くの人でにぎわった。主催者を代表し佐藤信逸町長が「ハード面では区切りを迎えましたが、このまちに命を吹き込み、住みよいまちにするためには地元のみなさまの力が必要。行政と一緒に新たな山田町大沢を作り上げ、次世代に引き継ぐことが私たちの責務であり、大震災により亡くなった方々に報いることになると思います」とあいさつ。会場は温かな拍手に包まれた。

## 希望をつなぐ新たな高台の家

この日を待ち望んでいたひとりが、三陸やまだ漁業協同組合参事

の鈴木雄寿さんだ。式典会場の後ろの宅地では、1月の入居に向けての工事が既に始まっている。震災前の家は防潮堤のすぐ後ろにあり、家族は無事だったが、津波ですべてを失った。

「流された場所にはもう住みたくなけれど、当時80歳だった親父が漁師を続けたいと言うし、やっぱり生まれたまちがいいもんね。いまの場所を造成すると聞いて、いち早く申し込んだんです」

震災後、漁に出られずふさぐことが多かったお父さんも、いまは毎日工事現場を見に行き、生き生きしているとか。

「うちでは現場監督って呼んでる(笑)。親父に早く新しい家に入ってもらおうのが楽しみだね」

山田湾で3代続く漁師の中村敏彦さんも、家の新築を待つひとりだ。震災時は漁で山田湾に出ていたところ、下から突き上げてくる地響きで地震を察知。船の上から燃え盛る山田町を見て眠れぬ一晚を過ごした。

翌日、陸に上がって防潮堤の水門を開けたら瓦礫の山で、夢じゃないかと思いました。幸い家族は

「将来も津波は来るという前提で、より安全に安心して住めるまちになるよう、高台避難用の道路を造るのに併せ、停電に備えてのソーラー付き防犯灯なども提案しました。私たちが作った高台の住宅地や避難場所、避難道路などが、1000年後の人の命をつなぐ場所にもなっていくかと思うと、大きなやりがいを感じますね」

スクラムを組んで事業を進めている、山田町役場建設課の尾形悟技師は語る。

「工事担当者さんは大沢に宿舎もあるので、地元住民という意識でお祭りや清掃作業などに参加してくださった。それも事業が円滑に進んだひとつの理由なのだと感謝しています」

多くの関係者の努力が、冒頭の「復興記念さすなまつり」へとつながったのだ。

山田町の他の地区でも、着々と復興への歩みが進んでいる。織笠地区では平成27年度から順次宅地が完成、新しい家が建ち始めている。今年82歳になる菊地サカエさん

「復興記念さすなまつり」へとは、84歳のご主人貞夫さんともに、9月23日に念願の新居に入居した。平屋建て、18坪の家は日常たりがよく、全室バリアフリーで、居心地も満点だ。

「4月の末にお父さんが腹を病んで入院したときは、新居さ入んねえで終わんだかと心配しましたが、大工さんたちが頑張ってくれてね。ここは高い場所です最高」

新居で元氣を取り戻した貞夫さんも「住み心地がいいですね」と穏やかな笑顔を見せる。

11月10日には、町の中心部の共同店舗がオープン。来年1月には町を通る国道の整備も終わる予定で、山田町にかつてのにぎわいが戻るのも、あと一息だ。

## 未来の町民へと引き継ぐまち

山田町他の地区でも、着々と復興への歩みが進んでいる。織笠地区では平成27年度から順次宅地が完成、新しい家が建ち始めている。今年82歳になる菊地サカエさん

## まちづくり実現のための工夫

「大沢地区は、今回の津波で7割近くの家屋が流され、130名を超える方が亡くなりました。住民には、不安なので高台に移りたいという人と、漁業のまちなので海から離れたくないという人の2つの意見の方がおられる。どうしたら双方の方が安心して暮らせるまぢができるか悩みました」と語るのは、山田町復興推進課の沼崎弘明課長だ。

高台の宅地造成された広い場所、「復興記念さすなまつり」が行われた



大沢地区の復興事業で難しかったのは、新たな防潮堤の建設に伴い、シミュレーションで最大規模の津波が来ても防潮堤で防げると想定されたため、通常の防災集団移転促進事業の

制度は使えないことだった。そこで、海に近い場所や低地部のかさ上げ、高台への移転に農林水産省管轄の漁業集落防災機能強化事業を、被災したまちの整理には国土交通省管轄の土地区画整理事業を適用するという、前例のない事業手法の組み合わせで2通りの住民の声にこたえることになった。「とはいえ、国が直轄でやってくれるわけでもないし、山田町には土木業者も技師もほとんどいない。専門の知識もないし……と途方に暮れているときに現れた救世主が、UR都市機構さんでした」

「2つの事業の役割分担を決めるのに苦労しましたね。一方、工事はスピーディーに着手しなければならぬ。両事業について住民の方に納得していただけるよう、何度も説明会を開きました」

「復興記念さすなまつり」へとは、84歳のご主人貞夫さんともに、9月23日に念願の新居に入居した。平屋建て、18坪の家は日常たりがよく、全室バリアフリーで、居心地も満点だ。「4月の末にお父さんが腹を病んで入院したときは、新居さ入んねえで終わんだかと心配しましたが、大工さんたちが頑張ってくれてね。ここは高い場所です最高」新居で元氣を取り戻した貞夫さんも「住み心地がいいですね」と穏やかな笑顔を見せる。11月10日には、町の中心部の共同店舗がオープン。来年1月には町を通る国道の整備も終わる予定で、山田町にかつてのにぎわいが戻るのも、あと一息だ。「復興記念さすなまつり」では、1000年以上生きるという3本の江戸彼岸桜が植樹された。平成に作られたまちで、1000年後の桜は、連綿と続く人々の営みを見守り続けることだろう。

UR 都市機構  
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます  
[企画制作]新潮社

